



しびき



CONTENTS

- 1 ドラム缶工業会の安全への取り組み
- 2 2019年度役員・委員長の紹介
- 3 新社長登場…JFEコンテナ(株) 那須七信
- 3 新社長登場…ダイカン(株) 東和彦
- 3 新社長登場…(株) ジャパンペール 黒田肇
- 4 識者による講演会 岸村小太郎氏
- 5 ペール委員会工場見学会レポート/AOSD開催案内
- 6 コンプライアンス勉強会/経済産業大臣からの感謝状
- 7 鋼製ドラムは、リサイクルの優等生
- 8 2018年度出荷実績/200Lドラム缶市場動向推移



ドラム缶工業会の 安全への取り組み



ドラム缶工業会 理事長 藤井 清澄

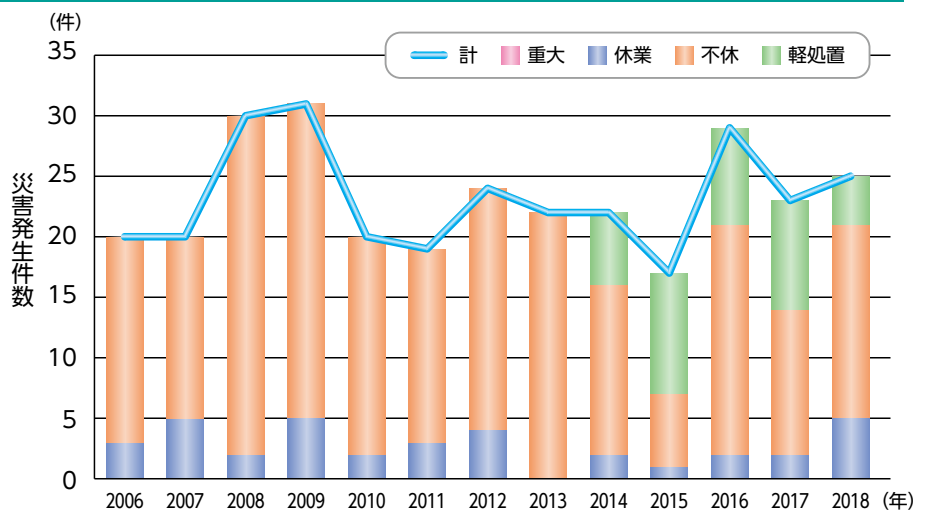
ドラム缶工業会では、2003年から会員会社で発生した労働災害事例を各社で共有し、類似災害の防止対策に努めてきました。2016年には安全委員会を立ち上げ、会員各社の安全委員が年に2回、顔を合わせ、安全委員長を選任し相互に情報交換するとともに、発生した災害事例を分析して類型化し、傾向と対策を議論しています。2018年には各社の安全衛生組織運営、災害事例と災害対策を資料にまとめ、相互発表会の開催を始めました。

ドラム缶製造は ①近接作業、②ライン稼働中の作業が特徴であり、「止める・離れる・足場の確認」が基本です。労働災害は設備対策および啓蒙活動での抑止、さらに、災害発生後の対策をいかに横展開できるかが重要であるとの認識です。

また、本年7月12日に行った相互発表会では、会員11社の発表の中で6件の熱中症対策が報告され、労働者の環境改善が急務であることが分かりました。一方で、昨年見られた受動喫煙対策は取り組みが進みつつあるようで、各社の共通課題の傾向が見られました。

下のグラフは近年における災害発生件数の推移です。2018年は生産量が好調だったという要因はありますが、2017年から増加傾向を示し、委員長からは危機的状況と報告されました。2019年に入ってから、昨年5件発生した休業災害の報告はゼロで推移しており活動の成果とも思えますが、安全の追求に終わりはなく、各社にて粘り強い取り組みを継続しています。

災害発生件数の推移



2019年度役員・委員長の紹介

2019年7月1日現在

■ 理事長		藤井 清澄	日鉄ドラム (株)	代表取締役社長
■ 副理事長	● 200L缶関係	那須 七信	JFEコンテナ (株)	代表取締役社長
	● 中小型缶関係	東 和彦	ダイカン (株)	代表取締役社長
	● ペール缶関係	金子 賢三	新邦工業 (株)	代表取締役社長
■ 常任理事	■ 兼監事	内藤 誠	斎藤ドラム罐工業 (株)	代表取締役社長
		黒田 肇	(株) ジャパンペール	代表取締役社長
		今井 久代	(株) 東京ドラム罐製作所	代表取締役社長
	■ 兼監事	下川 洋治	東邦シートフレーム (株)	代表取締役社長
		長尾 浩志	(株) 長尾製缶所	代表取締役社長
		足立 敏	(株) 前田製作所	取締役 生産本部長
		山本 和男	(株) 山本工作所	代表取締役社長
■ 委員長	● 企画・統計委員長	若杉 昌夫	日鉄ドラム (株)	取締役常務執行役員
	● 技術委員長	木原 幹人	JFEコンテナ (株)	取締役
	● ペール委員長	末井 洋	新邦工業 (株)	品質保証部長
	● 安全委員長	杉本 仁志	ダイカン (株)	取締役
■ 事務局長		坂元 信之	ドラム缶工業会	常務理事

注) 任期は2020年5月の総会まで

新社長登場

JFEコンテナ株式会社

代表取締役社長 那須 七信



1982年に川崎製鉄に入社、2003年に日本鋼管と合併したJFEスチールを経て37年間勤務、内33年間は営業一筋、自動車、建材、造船、鋼管、棒線の営業を通じ、あらゆる品種を経験させてもらった。一番長く携わったのは建材(16年間)、次に自動車(13年間)である。旧川鉄時代からJFEスチール時代までの33年間の営業経験を通じ、色々な人々と接してきたことで今の自分がある。良き先輩、いいお客様に恵まれたことを心から感謝する。

この度、ドラム缶業界に移り石油業界、化学業界とのお付き合いが始まった。初めてのお客様であり、新たな人達とのお付き合いが始まる。お付き合いの広がり自分にとって一生の財産である。

さて、国内ドラム缶事業は今や成熟産業。これからは量的拡大のみならず質的成長も併せて企業活動を続けていかなければならない。当社は「国内ドラム事業」のほか、「中国ドラム事業」、「高圧ガス容器事業」の3本柱で走っているが、どの事業においても、競争力強化に向け製造

実力を今以上に向上させること、加えて究極のコストダウンを推し進めていくことが必要だ。高機能化や合理化といったマーケット並びに顧客のニーズにしっかりと寄り添える新商品の開発と市場化に取り組み、業界を代表するリーディングカンパニーで在り続けたい。

当社がこうした活動を進めていくことが、ひいてはドラム缶工業会全体の将来にわたる持続的成長と発展に資するものと信じ、会員各社のお手本(模範)となれるよう、新社長として山積する課題のブレークスルーに向かってしっかりと舵取り役の責務を果たしていきたいと考えている。

1957年4月4日生まれ、酉年、62歳。先祖は1615年の大阪夏の陣で豊臣方に押し負けて敗走、這う這うの体で現在の大阪市西淀川区にある東本願寺系の寺に逃げ込んだという。以来400有余年大阪に在住、小生も生を受け大学を卒業するまで大阪で育った。そんな因果か、趣味の一つに日本刀の収集がある。

新 社長 登場

当社は本年4月で100周年を迎えた。その100年の月日を経るなかで、200L、中小型、ファイバー缶を手掛ける総合容器メーカーへの成長をなし遂げてきた。社長就任にあたってのあいさつとして、社員には「今は将来に向け歩みを始めるまさにスタート地点であり、会社の未来は我々の取り組みに大きく依存すると」と伝え、さらなる会社の発展に向け一致協力し、取り組んでいくことを新たに誓い合った。

ドラム缶を巡る需要環境等是不透明感も強まっており、厳しいものと認識している。そうしたなかでも、経営方針に掲げる総合容器メーカーとしての経営基盤強化を目指し、設備投資などを含め当初計画を継続していくとともに、その効果の早期発揮を図っていく方針に変わりはない。また当然のことではあるが、会社の基盤は安全、防災、環境である

ダイカン株式会社

代表取締役社長 東 和彦



ことも改めて全社を挙げて確認している。さらに今後は、未着手の商品に関するC/Sおよび生産における生産性、品質、コストおよび納期(PQCD)などを切り口に現状把握を行い、今後の計画に反映させていきたいと思っている。

私の経歴や趣味などに簡単に触れておきたい。1983年に神戸製鋼所に入社、それから製鉄所一筋で28年間にわたり勤めてきた。前半18年間は圧延を中心にプロセス制御に携わり、後半の10年間は厚板製品の製造を担当してきた。2011年に神鋼鋼板加工(厚板溶断加工業)社長に就任、関東で单身生活を送ってきた。そして2019年6月よりダイカンに着任している。1957年生まれの61歳。健康増進に向けウォーキングを続け、今後は趣味につながるべく山登りへ挑戦しようと思っているところだ。

新 社長 登場

株式会社ジャパンペール

代表取締役社長 黒田 肇



前社長の長島氏とはメタルワンで薄板部に異動してからの付き合いである。大阪薄板部長には長島氏の後任として就任、ズズヤスでは長島氏が主管部長および非常勤取締役、そして今回長島氏の後任として社長就任と非常に深いつながりがあり、感慨深い。これまでの長島氏の路線を継承して「経営理念～ジャパンペールのこだわり～」「ビジョン～ジャパンペールの目指す姿～」の下に安全第一で、お客様を意識した、トップダウンではなく社員一人ひとりが考えて行動するボトムアップのチーム経営を推し進めていこうと思っている。

これまで2回理事会に出席したが、工業会では非常に活発な活動が行われていると感じた。まずは安全第一を意識した無事故・無災害への取り組みを期待するとともに、各社の事故事例や安全対策への取り組みの共有、他業界の取り組み紹介を通して組合員が無事故となることにつながればと思う。また、容器業界の今後の方向性などの

情報を発信して、会員で一緒に考えて業界として発展していければよいとも考えている。

個人的な状況をいうと、東京勤務の時は週末にはプールで1～1.5キロメートルを泳ぐのと、家で(B級・C級)料理を作って食べて飲むのが楽しみだったが、大阪へ来てからまったく泳いでいないので、近頃は太り気味などが少々気になっている。

1981年4月に旧日商岩井に入社、2003年にメタルワンに転籍、2011年にズズヤス社長に就任といった経歴を歩んできた。勤務38年間のうち入社後5年間を除いて33年間は国内薄板を担当、内13年間は自動車担当、ズズヤスの8年間も半分が自動車向けなので、21年間国内自動車薄板を担当したことになる。ブリキ容器関連は薄板部長と大阪薄板部長の時に管轄したのみで、主力として扱うのは今回が初めてとなる。1959年生まれ、60歳。

海洋プラスチック問題への取り組みと プラスチック資源循環戦略

講師：日本プラスチック工業連盟 岸村小太郎 専務理事

ドラム缶工業会では恒例の識者による講演会を企画。今回は国際問題になっている海洋プラスチック問題をテーマに、日本プラスチック工業連盟の岸村小太郎専務理事をお招きしてご講演いただきました。社会的な話題とあって約80名の会員が参加、会場を埋め尽くしました。

海洋プラスチック問題は、食品包装等の生活で使用されたプラスチックごみが河川などから海洋に流れ着き景観を乱すとともに、マイクロプラスチックをウミガメや魚類など海洋生物がエサと間違えて食べて死んでしまうなど生態系への影響が懸念されています。今年のG20大阪サミットでも議題に上がり、各国でプラスチック資源循環戦略が打ち出されました。

日本プラスチック工業連盟ではプラスチック最適利用社会の実現に向けた取り組みを推進

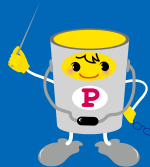
し、環境配慮との両立を目指すなかプラスチックの賢い利用に向けた使用者・消費者の理解促進やリサイクルの有効利用と再生材の利用促進、バイオプラスチックなどのイノベーション推進など、プラスチック業界が率先してサプライチェーンを通じた海洋プラスチック問題の解決に取り組む方針です。会場からは問題の難しさを指摘しつつも、身近なシーンでの使用済みプラスチックへの取り組みが重要との指摘を再確認しました。

また懇親会の中で、リサイクルのシステムが確立しており、複数回リユースが可能で、最終的にはスクラップにした後、鋼材として再使用が可能な「ドラム缶」の優位性、利便性をより広くPRしていく必要があるという意見も出ました。



講師プロフィール

1979年三井石油化学工業（現 三井化学）に入社、機能性ポリオレフィンの研究開発等に従事。1995年より理化学研究所（1998～2000年は理研から旧科学技術庁に転出）。2001年三井化学に復職し茂原分工場管理部長などを経て、2013年より日本プラスチック工業連盟。2016年より現職。プラスチックに関する正しい知識の普及に努める傍ら、海洋プラスチック問題をはじめとする、プラスチックに関わる様々な問題について積極的に発言している。



ペール委員会工場見学会レポート

花王株式会社 豊橋工場



ドラム缶工業会のペール委員会は4社(7工場)で構成されています。ペール委員会は「オートメーション技術の調査」の活動として、毎年、異業種の優れた品質・生産管理を学ぶための工場見学会を開催しています。



日時 2019年4月11日(木)午後1時~午後3時
見学場所 花王株式会社 豊橋工場
 愛知県豊橋市明海町4-51
見学参加者 鋼製ペール4社 14名



花王(株)は1940年に日本有機(株)として設立され、豊橋工場は1981年に操業を開始しました。現在は「ビオレ」「ニベア」などの同社のスキンケア製品を生産する中核工場となっています。

原料の配合、容器への充填、梱包ラインを見学しました。建物は4階建て構造で非常に清潔なクリーンルーム化されています。複数あるラインで、販売動向によって少量多品種を作り分けるために、原料タンクから直結するラインや、一旦小型のタンクに受け取ってから供給するライン等の使い分けで柔軟な生産を可能にしています。容器充填、梱包ラインは無人運転され、容器の位置決め、キャップの装着、不良品の検出もすべて自動です。人手が関与するのは生産の開始時と、操業中に容器の供給が詰まったり、遅れたりするときくらいです。

我々ペール缶製造でも人手不足解消のための自動化やクリーン化が課題であり、同社の常に新しいものを生み出そうという社風は非常に勉強になりました。

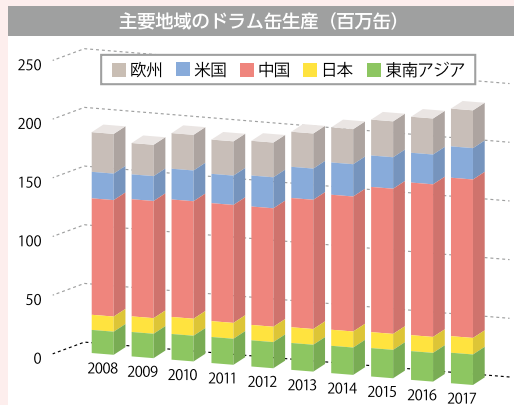
2019年AOSD国際会議の開催が迫っています テーマは「環境保護とドラム缶の社会的使命」

前号でもお知らせいたしました、本年は3年に一度のアジア・オセアニア鋼製ドラム製造者協会(AOSD)の国際会議が10月15日~17日にかけて中国蘇州で行われます。

テーマは「環境保護とドラム缶の社会的使命」で、日本からは新缶、更生缶、ペール缶、口金、バンド製造の各社から約80名が参加する予定です。開催地の中国をはじめインド、韓国、タイなどのアジア主要国ならびにアメリカ、ヨーロッパからも集まり、参加者は200名を超える規模になります。各地域からの統計の報告に続いて、技術発表が

約20件予定されています。そのうち約半数は世界最大のドラム缶製造国である中国からで、環境問題やリユース、排水処理等についての活動の成果が2日間に分けて発表される予定です。

参加諸国各社によるブースでの展示や、屋外ではドラム缶を打楽器として使う音楽演奏も予定されています。3日目は大手ドラム缶メーカー2社、設備メーカー1社の工場見学会が行われます。参加のご希望がありましたら、ドラム缶工業会事務局までお問い合わせください。



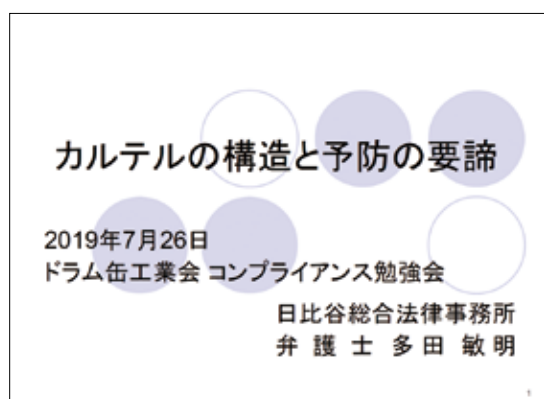
コンプライアンス勉強会

ドラム缶工業会は、本年も7月26日にコンプライアンス勉強会を開催しました。日比谷総合法律事務所の多田敏明弁護士を講師に迎え、「カルテルの構造と予防の要諦」と題した勉強会に会員各社から約70名が出席しました。ドラム缶工業会では、毎年この勉強会を通じて独占禁止法の目的と仕組み、カルテルの危険領域と予防策、カルテル発覚の容易性、法人だけでなく個人に対する制裁とペナルティの大きさについて、きちんと復習・確認を行う機会を設けています。

後半では、昨年から本年にかけて発生した実例を見ながら、昨今の審判官の判断根拠、司法取引制度の現状、活発化する損害賠償請求の動きに迫りました。品質保証とコストダウンの問題、縦割り人事組織の弊害がコンプライアンス問題につながりかねないことも取り上げられました。

本年は、トピックとして、業務提携とカルテル、OEMでの注意点、また共同物流・共同購買での留意点についても説明されました。

出席者は熱心に聴講し、年に一度の緊張感のある勉強会となりました。



平成30年7月の西日本豪雨災害復旧支援に対する 経済産業大臣からの感謝状

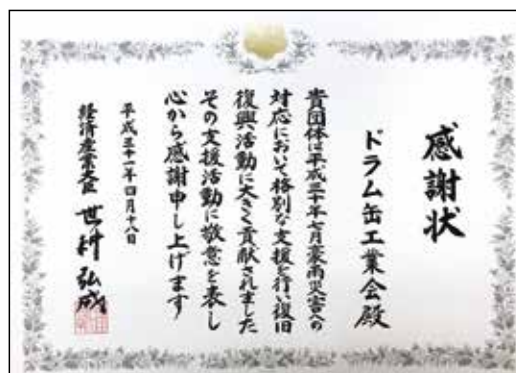
2019年5月9日 ドラム缶工業会

ドラム缶工業会が経済産業省からの緊急支援要請を受け、ペール缶(20L)約1,600本の無償緊急出荷を行ったことは、すでにご報告のとおりですが、このたび経済産業大臣から感謝状が授与されました。

経済産業省は、平成30年7月豪雨災害または平成30年北海道胆振東部地震において、経済産業省の要請または国との連携を通じて、例えば、昼夜休日を問わない復旧対応や物資の無償提供など通常の商取引を超える迅速な緊急対応を行い、避難所生活や住民生活の改善に貢献した170の企業・団体に対して感謝状を授与しました。(経済産業省のホームページより)

<https://www.meti.go.jp/press/2019/04/20190425009/20190425009.html>

当工業会へは5月8日に井上製造産業局長から藤井理事長に手交されました。



鋼製ドラムは “リサイクルの優等生”



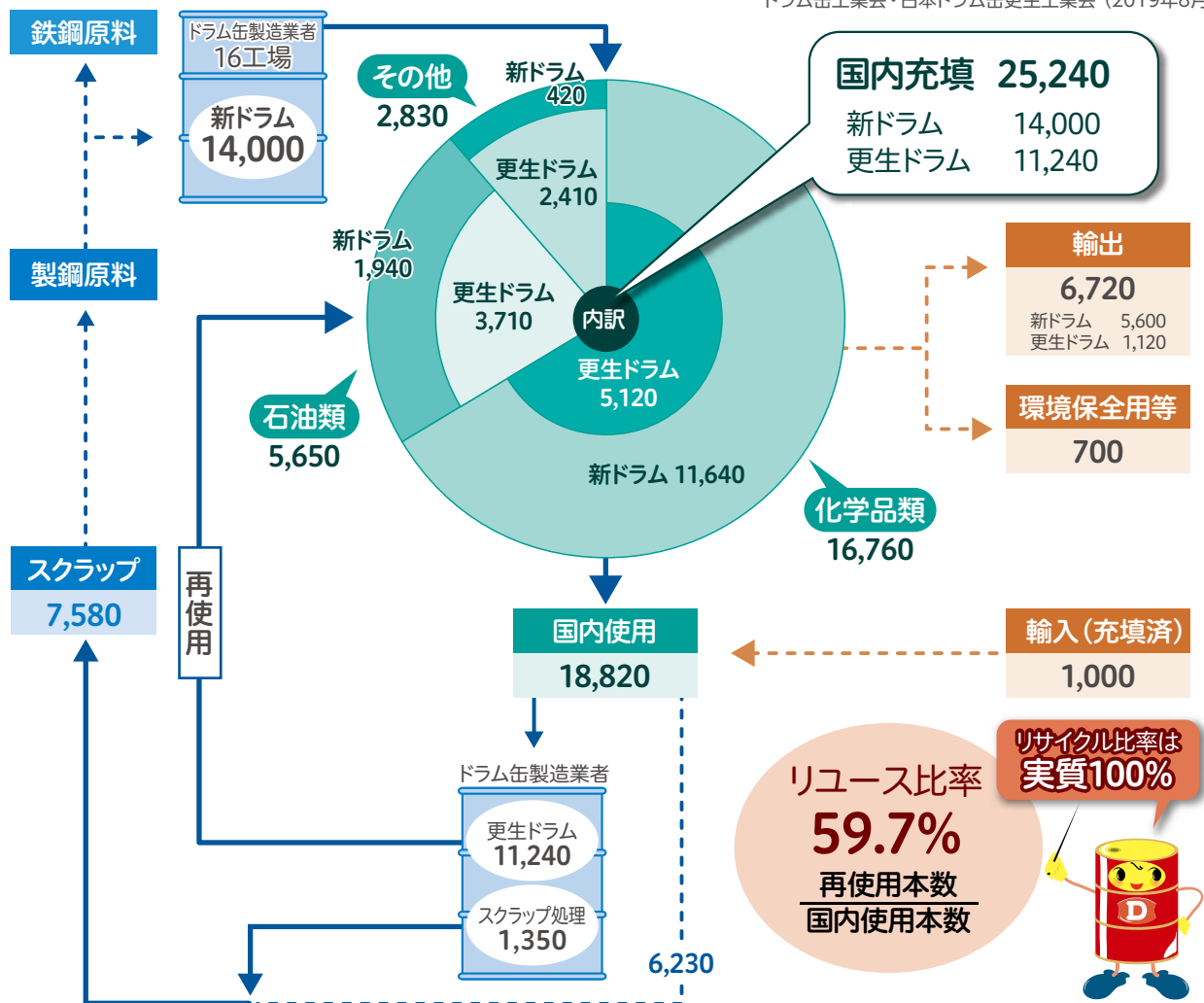
資源としてのリサイクル比率は実質 100%

鋼製ドラムは使用后、一部は更生缶メーカーに回収され、一部はユーザーから直接スクラップ処理業者に回収されています。ドラム缶はこのようにリユース（再使用）およびリサイクル（再利用）のシステムが確立しており、循環型リサイク

ルの優等生といえます。下の図は平成30年度版200L鋼製ドラム リユース&リサイクルフローチャートです。ドラム缶のリユース比率は59.7%になりますが、環境保全用ドラム缶を除くと、資源としてのリサイクル比率は実質100%になります。

200L鋼製ドラムリユース&リサイクルフローチャート (平成30年度ベース 単位:千本)

ドラム缶工業会・日本ドラム缶更生工業会 (2019年8月)



		当初(平成9年)	25年度ベース	26年度ベース	27年度ベース	28年度ベース	29年度ベース	30年度ベース
工場数	新ドラム	18工場	16工場 (変わらず)	16工場 (変わらず)	16工場 (変わらず)	16工場 (変わらず)	16工場 (変わらず)	16工場 (変わらず)
	製造本数							
製造本数	新ドラム	12,000千本	13,450千本 (+2.4%)	13,730千本 (+2.1%)	13,570千本 (▲1.1%)	13,640千本 (+0.5%)	14,130千本 (+3.6%)	14,000千本 (▲0.9%)
	更生ドラム	16,000千本	10,770千本 (+7.0%)	10,950千本 (+1.7%)	10,850千本 (▲0.9%)	10,920千本 (+0.6%)	11,020千本 (+0.9%)	11,240千本 (+2.0%)
国内充填		28,000千本	24,220千本 (+4.4%)	24,680千本 (+1.9%)	24,420千本 (▲1.1%)	24,560千本 (+0.6%)	25,150千本 (+2.4%)	25,240千本 (+0.4%)
国内使用		26,000千本	18,060千本 (+4.8%)	18,390千本 (+1.8%)	18,210千本 (▲1.0%)	18,310千本 (+0.5%)	18,700千本 (+2.1%)	18,820千本 (+0.6%)
リユース比率		61.5%	59.6% (+1.2%)	59.5% (▲0.1%)	59.6% (+0.1%)	59.6% (0.0%)	58.9% (▲0.7%)	59.7% (+0.8%)

2018年度出荷実績

2018年度の200L缶の出荷は、前年度に比べ0.9%減、132千本減の14,000千本となりました。

用途別では、前年度に比べ化学向け(3.0%減、336千本減)、塗料向け(3.5%減、27千本減)、その他向け(7.8%減、15千本減)が減少し、石油向け(13.3%増、228千本増)、食料品向け(8.0%増、17千本増)が増加しました。

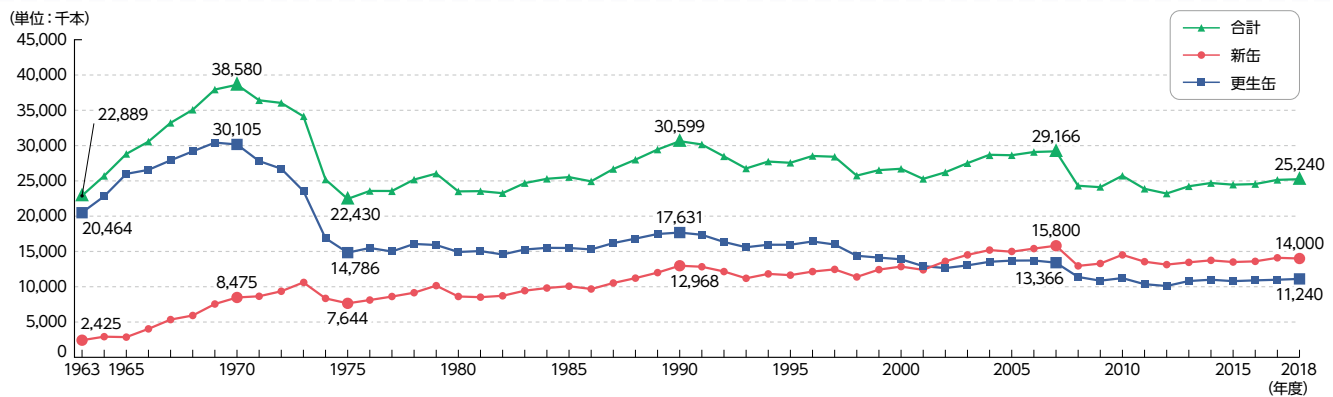
ペール缶は前年度比0.6%減の19,426千本、中小型缶は同25.2%増の521千本となりました。

2018年度缶種別・用途別出荷実績

缶種	2018年度実績						
	本数 (千本)	前年度比 (%)	用途別〔(本数) (千本)〕				
			石油	化学	塗料	食料品	その他
200L缶	14,000	99.1	1,944 (113.3)	10,905 (97.0)	736 (96.5)	235 (108.0)	180 (92.2)
ペール缶	19,426	99.4	10,241 (99.6)	8,107 (99.7)	546 (91.6)	0	532 (98.5)
中小型缶	521	125.2	0	499	7	0	15
亜鉛鉄板缶	399	114.2	0	387	1	5	6
ステンレス缶	38	104.6	0	38	0	0	0
合計	34,384	—	12,185	19,936	1,290	240	733
※前年度比 (%)	—	—	109.4	97.4	95.9	108.0	92.2
※構成比 (%)	—	—	17.1	74.8	5.0	1.6	1.5

(注) 1. 用途別200L缶、ペール缶の下限()は前年度比。 2. ※前年度比ならびに、※構成比は、トン数ベース。
3. 亜鉛鉄板缶、ステンレス缶は、200Lドラムおよび中小型缶を含む。 4. 総本数は、34,384,424本。表上数値は四捨五入による差異がある。

200Lドラム缶市場動向推移 (1963年度~2018年度)



(注) 1. 千本以下四捨五入。 2. 1963年度の新缶生産本数は不明につき、生産トン数67,002トン(1965年暦年平均単重27.63kg)で逆算して算出した。

会員			ドラム缶工業会	
《正会員》 ● 斎藤ドラム罐工業(株) ● JFEコンテナ(株) ● (株)ジャパンペール ● 新邦工業(株) ● ダイカン(株) ● (株)東京ドラム罐製作所 ● 東邦シートフレーム(株)	● (株)長尾製作所 ● 日鉄ドラム(株) ● (株)前田製作所 ● (株)山本工作所 《準会員》 ● 森島金属工業(株)	《賛助会員》 ● エノモト工業(株) ● (株)大和鉄工所 ● 三喜プレス工業(株) ● (株)城内製作所 ● 東邦工板(株) ● (株)水上工作所	〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10 (鉄鋼会館6階) TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969 e-mail: drum.pail@jsda.gr.jp URL: http://www.jsda.gr.jp/ ひびきNo.79 (2019年9月12日発行) 発行人 ドラム缶工業会 常務理事 事務局長 坂元 信之	

無断での複製、転載はお断りいたします。詳細はお問い合わせください。
本誌は環境に配慮した工程で印刷しています。